

鮎川哲也探偵小説選Ⅱ
目次

冷凍人間	2
透明人間	58
鳥羽ひろし君の推理ノート	
テープの秘密	155
灰色の壁	170
真夏の犯罪	185
幻の射手	198
クリスマス事件	211
冬来たりなば	225
油絵の秘密	238

鯉のぼりの歌	252
幽霊塔	265
黒木ビルの秘密	278
ろう人形のナゾ	292
斑鳩の仏像	306
悪魔の手	320
片目の道化師	329
魔人鋼鉄仮面	365
特別寄稿 そんな『コース』もあつたね 北村薫	385
【編者解題】 日下三蔵	388

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

鮎川哲也少年小説コレクション 上

冷凍人間

挿絵・古賀亜十夫

くつみがき

三吉さんきちの仕事場は銀座のはずれのやなぎの並木の下にある。そこにずらりとならんだ五人のくつみがきの中で、いちばんの年少者が三吉なのであった。くつみがきという仕事は、夏はあつい太陽にじりじりと照らされ、冬はさむい風にふきさらされて、とてもつらいものである。だが、三吉は一度もぐちをこぼしたことはなかった。ぶつぶつ不平を言うことが大きらいだったからだ。それほど三吉は負けん気がつよく、そして元気な少年なのである。

そのとき三吉は、わかい女の人のハイヒールをみがいていた。グリーングリーンの洋服を着てハンドバッグをかかえた、やさしそうな人だった。小学校のとき音楽を教えてくれ

た先生に、どことなく似ている。三吉は一生けんめいにくつをみがいていた。

「どう？ 決心がついたこと？」

女の人は、となりで短くつをみがかせている青年にむかって話しかけた。その青年は黒めがねをかけ、灰色のソフトをかぶっている。気の毒なことに右腕がないとみえ、水色のオーバーの右そでが、肩のつけ根のところからガラリとさがっていた。

「時彦ときひこさん、あなたがあの悪い仲間とつきあっているかぎり、あたし時彦さんのおくさんにならないわよ」

「うむ……」

時彦とよばれた若者は、短く答えてじつと考えこんでしまった。

時彦はこのきれいな女の人を、およめさんにもらいたいらしいのだ。ところが女の人は、時彦がわるいやつと友だちなので、彼らとえんを切るようにすすめているのだった。

「……うん、和子かずこさんがいうとおりだ。じつはぼくも、あいつ等と仕事をするのがいやになったんだ。やつらはまるで悪魔みたいにざんく、なんだからね。きみの言うようにキツパリえんを切ることにしよう」

「ほんと？ 約束してくださいさるわね？」

「ほんとうだとも」

「よかったわ。それじゃ、あたしも、あなたの奥さんになることを約束するわ」

女の人がはずんだ声で言った。三吉は下をむいて、くつをみがいているから、ふたりの顔は見えない。しかし女の人はいかにもほっとしたような、はれやかな声であった。

「はい、お待たせしました」

くつをみがきあげた三吉は、元氣よく言った。

「きれいになったわね。おいくら？」

「三十円いただきます」

「そう。おつりはいいのよ。キャラメルでも買ってあげりなさいな」

女の人は百円玉をくると、時彦とうでをくんで行ってしまった。

三吉は腰をウンとのぼして、二、三度体操みたいな動作をくり返したのち、電車通りのビルの上の、青い空を見あげた。

そうだな、キャラメルかガムでも買って食べようかな……。三吉はそう考えながら、空をながめていた。三吉が、あの特長あるしわがれた男の声を聞いたのは、そのときである。

「やろうッ！ うらぎる気だな？」

三吉はびつくりして顔をあげた。となりの公衆電話のかげに立って、時彦と和子のうしろ姿をにくしくしげに見送りながら、その男はくわえていたタバコを歩道の上にたたきつけ、大きな鼻のあなから灰色のけむりをフーッとはきだした。

「どうもようすがへんだと思ったから、尾行していたんだが、やっぱりおれたちをうらぎる気だったんだな。

ようし、親分に報告をして、ひでえ目にあわせてやるぞ」

そう言ったかと思うと、ジロリとこちらをむいた。男は、お祭のときにテンテックステンテンとおどりがらやって来る、おシシの面そっくりな顔をしている。口をあけると、金歯がぞろりとならんでみえた。

「おい小ぞう、おれのくつもみがけッ」

男は三吉の前に、どろだらけのくつをぬつとつきだした。

怪自動車

それから三日のちのことである。仕事をおわった三吉は、くつクリームやブラシのはいった箱をかかえて、夜の町を家路についた。三吉が働いている銀座と、家のある深川までの間は、ほぼ四キロ近い距離になる。三吉はそれを歩いて通っているのであった。

にぎやかな銀座通りから遠ざかるにしたがい、人かずはしだいにまばらになってくる。隅田川の橋を渡って、大通りから横道にまがると、ゆきかう人もほとんどなくなるのであった。ただ、三吉のくつ音だけがコツコツとひびいている。腕時計の針はすでに十一時すぎをさしていた。

うしろから自動車が走ってきた。くらい道路がパッと明るくてらしたされ、三吉の影がまるで大入道のように、大きくながく道路にうつった。一台の車がすべるように三吉の横を走りぬけていった。

「おやッ?」

急に三吉は立ちどまった。自家用車らしい車。その車の中に、三吉は意外なものを見かけたのである。ふたり



の男に手足をおさえられ、しかもなお車からとびおりようとしてもがいていた男。黒いめがねをかけ、灰色のソフトをかぶって水色のオーバーを着ているその男。それは時彦にまちがいがなかった。

……では、時彦はなぜあのようにもがいているのであ

ろうか。彼をおさえつけている人々は、いったいだれなのであろうか。

「あれッ？」

二台目の車が通りすぎた瞬間、三吉はまた棒のように立ちどまってしまった。二台目の車にのつてニタニタわらっている男の顔にも、やはり見おぼえがあったからである。くちびるの間から、ピカピカ光る金歯がのぞいていた。……あの男だ！ 電話ボックスのかげにかくれて、ようすをうかがっていた、あの男にちがいない！

「親分に報告して、ひでえ目にあわせてやるぞ……」

そうつぶやいた男のことばが、いまもなお三吉の耳のおくにこびりついている。三吉は、時彦という青年の運命が、にわかには心配になりだした。時彦の身の上になにかわるいことが起きそうな予感がして、不安になつてきた。

二台の自家用車は、二〇〇メートルばかり走つたのち、右に向きをかえると、どこかの門をくぐつたとみえ、赤いテール・ライトが急にかきけすように見えなくなった。まるで、さい眠術にでもかけられたかのように、ジーツと自動車のゆくえを見つめていた三吉は、そこでハッとわれにかえたのである。

車はいつていったところがどこであるか、朝晩この

通りを往復している三吉は、すぐ見当がついた。そこには製氷会社がある。そしてこの会社は、氷が売れなくて、うけが少ないために、去年の秋以来その工場を閉じているはずであった。時彦をだれもいない会社につれこんで、そこで彼等はなにをするのだろうか。

そうだ、窓からようすをみてやろう。そう決心した三吉は、製氷会社のほうに向かつて、いそぎ足で歩き始めた。

あわれな犠牲者

高いへいにそつて進んでいくと、赤茶色にさびた大きな鉄の門がある。いつもはピツタリしまつていたのに、今夜はあけてあつた。門をはいつた三吉は、そつとあたりを見まわした。目の前のくらやみの中に、会社の建物がぐるぐると立っている。だがどの窓もまっくらで、あかりは一つもついていない。だれもないようだ。

ふいに三吉は耳をそばだてた。もし三吉がいぬだったら、その耳はピクリツと動いたにちがいない。……きこえる。……なにかの物音がきこえる……ゴットン、ゴットンという音にまじつて、モーターの音がする。

その音は、どうやら製氷工場のほうからきこえてくるようである。三吉は足音をしのばせ、会社のよこを通りすぎて、裏手の工場へまわった。モーターの音は工場に近づくにつれて、しだいにはっきりとしてくる。

三吉はなおも足音をしのばせて、歩きつづけた。くらいから、足もとに気をつけなくてはならない。何かにつまづいて音をたてたなら、たちまち気づかれてしまうのだ。

二台の車がエンジンを止めて駐車してある。そのむこう側に、工場の窓がぼんやりと明るくみえた。モーターのひびきも、そこからきこえてくるようであった。三吉は窓に近づいて中を見ようとしたりけれど、残念なことに身長がたりないのでのぞくことができない。

いそいであたりを手さぐりでさがし、ようやくリングのあき箱をみつけたすと、それを窓の下にすえてふみ台にした。いまや三吉の胸はわくわくしている。去年の秋から運転を休止していたはずの工場の機械が、今夜にかぎってなせ動いているのであろうか。モーターのうなりをきいた瞬間から、三吉の胸はその疑問でいっぱいになつていたのである。

三吉が息をひそめてのぞいた場所は、工場の一室で、天井と壁にそって、太いパイプや細いパイプが、二十本

近くはりめぐらされていた。三吉は解剖された動物の腹の中をながめているような、へんてこな気分になった。

太いパイプは大腸だ。そして細いパイプは小腸だ。三吉はガラスに目をおしつけ、どんな声でもききのがすまいとして、耳をすませた。

「親分、あつしはたしかにこの耳できいたんですぜ。

この森時彦のやつは、おれたちの仲間からにげだそうということを、女と相談してやがったんです。おれたち、仲間をうら切ろうとしたやつには、きびしいせいさいを加えるのが、イカリ組の規則じゃねえですか。親分、思うぞんぶんこらしめてやりましょう」

しわがれた声でそう言ったのは、鼻のあなの大きな、金歯をはめた男であった。口をひらくたびに、金色の歯がキラキラとかがやいてみえた。

「おい森、おまえはほんとうにおれたちをうらぎるつもりだったのか」

「親分」とよばれた音羽権兵衛おとわごんべえは、のっそりと立ちあがった。でつぶりとふとった男で、その動作はどこかうしに似ている。右手にもっているのはふといムチだった。

「おい森、よく考えてから返事をしろ。われわれの仲間から逃げだそうとしたやつは、どのような理由があるにしろ、死刑にする約束なんだ。それを知らぬお前で



もあるまい」

音羽権兵衛は、いかにもギャングのボスみたいな声です。男だった。壁ぎわに立たされた森時彦はまるで銅像のようになにを言われてもじっとして、身動きひとつしない。よく見ると動かないのは当然で、手も足も細いビニールのロープでしばられているのである。ただそのくちびるが、いかにも残念そうにゆがんで見えた。

「知ってるとも」
時彦は答えた。

「しかしおまえたちといっしょに仕事をするのはもうごめんだ。ぼくは、お前たちが悪者だということを知らなかったから、仲間になったんだ。だがきさまたちは、まるでママシヤサソリみたいな悪人ばかりだ。ぼくはつくづくあいそが つきたのだ」

「だまれッ！ なまいき言うな！」
大声で音羽権兵衛がどなった。窓ガラスがピリリとふ

るえるようなすこい声だ。きいていた三吉が、あやうく
リング箱からおちそうなおそろしい声だった。

「よくもほざいたな。よし、このムチのいたさを思い
知らせてやるぞ。こいつで貴様の息がとまるまで、千回
でも二千回でもたたきつづけてやるんだ。おい、二ノ宮
ッ、こいつをはだかにしろー!」

「へい、承知しました」

金齒の男がしわがれた声でいうと、つかつかと近づい
てきて、時彦の洋服の肩に手をかけた。すると、それを
おしとどめたのが、杉川徳平すぎかわとくへいというやせた青白い顔の男
であった。

「ちよつと待ちたまえ。親分、それからみなもきいて
くれ。ほくも森時彦がにくらしくてたまらない。なぶり
殺しにしてもあきたらないほどだ。しかし、だからとい
って、ムチでなぐり殺すのはじょうずな方法ではないと
思う」

「ふむ。ではどうすればいいのだ?」

「ほくが、この工場の製氷技師であることをわすれな
いでもらいたいね。ほくはこいつを製氷室にぶちこんで、
生きたままカチンカチンに氷らせてしまおうと考えたん
だ。つまりだな、人間の冷凍魚みたいなものができ上が
るといふ寸法なんだ」

「うまいッ、そいつは名案じゃねえか」

片目に眼帯をした男が答えた。胸はばがコンクリート
のようにあつく、ゴリラみたいにがっしりとした体格で
ある。はだかになったならば、からだ中に針金のような
毛が一面にはえていそうな感じがした。

「カチカチにこおった死がいは、はこびだして町かど
にすてておけばいいんだ。まさか冷凍室でこおらされた
とはだれも気がつくめえ。よっぽらって、道ばたで寝て
しまつてよ、ごえ死んだものと思われらア」

やせたノツポが言った。まるで野原の一本すぎみたい
に、ヒョロリとした男だ。身長は少なくとも一メートル
八〇はありそうに見える。

「そうさ。それがほくのねらいなんだ」

杉川徳平は一同をみまわしながら、ゆっくり言った。
色白の女のような顔をしているくせに、なんとというおそ
ろしいことを考える男なのだろう……。三吉のせなかの
あたりがぞくぞくしてきた。

「そうすれば、われわれは決してうたぐられることも
ないし、あやしまれることもないんだ。どうです親分、
いい考えでしょう?」

「うん、さすがに杉川徳平だ、頭がいいぞ。早速こい
つを冷凍してしまおう。おい森時彦、おとなしくおダブ

ツしろよ。二億円の品物は、のこった五人でやまわけするからな」

酒をのんだようにテラテラしたあから顔にあざけり笑いをうかべて、音羽権兵衛は時彦の頭のとっぺんからくつの先まで、じろりとイヤな目でながめた。時彦はすでにかくごをきめているのだろう。しかし、いかにもくやしそうな顔つきだ。

「おい。早いとこぶちこんでしまえ」

杉川徳平はへやをよこぎると、正面の鋼鉄のドアに手をかけ、それをぐいと引いた。おもたいとびらがギイイと開いて、白いしものこおりついた製氷室がみえた。それは、見ただけでひやりとするほどの、冷たそうなひえびえとしたへやであった。

「さあ、森時彦。この中にはいるんだ」

製氷技師はあらあらしく時彦のからだをかかえると、荷物をひきずるようにして、製氷室の中にどざりとなげこんだ。

「おい、死んだら化けてでてこいよ。おまえの幽霊をとっつかまえて、もう一度こおらせてやるからな。アツハハハ」

腹をかかえてわらいながら、どすんととびらを閉じてしまった。

「杉川、何時間ぐらいで冷凍されるものかねえ？」

親分がたずねる。時彦のこおってしまふのが、まちどおしくてたまらないらしい。

「そうですね。四時間とみれば十分ですが、まあ一時間余分にみて、あと五時間たてばコチコチにこおってまいりますよ」

「そうか。しかしこの寒い工場で五時間も待っているのはたいへんだからな。いったんみな自分の家へ帰って、五時間のちにふたたび集まることにしよう。それまでぐっすり眠るんだな」

親分がそう言うと、あとの連中もさんせいしてぞろぞろと立ちあがった。三吉はあわてて頭をひっこめ、五、六メートルはなれたものかげにひっこんで、こっそりうすをみることにした。みつけられたら一大事だ。

しまった！

悪者共をのせた二台の車は、ガソリンのにおいを残して、通りのほうに走り去っていった。それをみとどけたのち、三吉は立ちあがって、あらためて窓の中のをのぞきこんだ。冷凍モーターがウーンとうなっているばかりで、

なにも見えない。電灯が消してあるからだ。

三吉の頭の中では、あのボスが言った『二億円の品物』ということばがうずをまいていた。二億円……、それは気が遠くなるような大金だ。『二億円の品物』とは、いったい何だろうか。しかもそこには、なにか秘密めいた空気がただよっているのである。

ふと三吉はわれにもどった。いまはのんびり考えている場合ではないのだ。一刻もはやく、森時彦の命を助けださなくてはならない。そこで三吉は工場の入口に突進して、そのドアをあけようとした。しかしボスどもが、カギをかけていったため、どうしても開かない。三吉はあせった。ノブをにぎって右にまわし左にまわし、ガタガタやってみたけれど、どうしてもだめだった。

「よわったな。おまわりさんに知らせようか」

風がつめたい夜だったのに、三吉のまるいおでこには、汗がびっしょりとうかんでいる。

「そうだ。窓と裏口をみてみようー」

さげぶより早く走りだすと、あらゆる窓と裏口のドアをひっぱってみた。だが、どこもピタリと、とじてある工場の中しにのびこむことは、なんとしてもできないのであった。……どうしようか。いまから警察へいったのでは、その間に時彦がおおってしまうかもしれない。

耳をすませるまでもなく、冷却機のモーターの音はたえることなくつづいていた。それにつれて冷凍室内の温度はどんどん降下し、やがてマイナス五度……六度……七度とひえてゆくのである。時彦の筋肉と内臓がかたくこおりついてしまうのは、時間の問題だ。

そうだ、窓ガラスをたたきわって、そこから手をさしこみ、カギをまわしてやろう。そう考えたとなんに、三吉の心には、急に勇氣と元気がわきだしてきた。

三吉は走りだした。先ほどまでのぞき見をしていたあの窓にむかって、夢中でかけた。だが、それがましがいのものになったのである。夢中になった三吉は、足もとに注意することを、つい忘れていた。そこに大きな穴がほってあることに少しも気がつかなかったのだ。

「あッ……」

三吉の悲鳴は、むなしくくらのやみに消えた。三吉のからだはドサリとばかり穴のそこにたたきつけられ、それきり気をうしなってしまった。そして冷却機のモーターだけが、いつまでもなりつづけていた。

開いたとびら

ゴットン、ゴットン……。どこか遠くのほうで音がしている。あれは、たしか水車のまわる音だ。小学生のころに、遠足に行った埼玉県のいなかで、静かにのんびりとまわっていた水車の音だ。

水車小屋のわきに、つめたくきれいな水がながれている。竹やぶの中でウグイスがなき、川の向こう岸にはモモの花がまつさかりだった。

「おい、メダカが泳いでいるぞ。おい……」

友だちをよほうとして、三吉は自分の声で目がさめた。モモの花も水の流れもかきけすように見えなくなり、あたり一面のくらやみである。おや？　ほくはなぜこんなところに寝ているのかな？

三吉は自分で自分に質問してみた。そうだ、いままでユメをみていたのだ……。

だが、待てよ。三吉はまた小首をかしげた。目がさめたにもかかわらず、水車の音はいまもなお聞こえてくるではないか。ふしぎだな、なんだろうあの音……。

急に三吉はわれにかえった。そうだ、ここは製水会社

の庭なのだ。ほくは庭を走っていて、石につまずいて穴の中におちこんだのだ。とするとあの音は、冷凍室のモーターではないか！

三吉はよろよろとおき上がった。冷凍室の中でコチョコの氷になりかけている、あの時彦青年のことを思いだしたからである。早くたすけにゆかないと、死んでしまうぞ。

穴は三吉の肩ぐらいの深さだった。三吉はそんなことには目もくれずに、ただいちもくさんに工場のほうへ走りだしていた。ゴットン、ゴットンというモーターの音が、時彦のうめき声のように聞こえるのだ。

ところが、工場のそばまでいった三吉は、ぎよつとして立ち止まってしまった。入口のドアがぱつくりと開いているのではないか。どうしたのだろう……。三吉はあわてて工場にとびこみ、冷凍室の電気のスイッチを入れた。だがつぎの瞬間三吉はアッとさげんだきり、その場に棒のように立ちすくんでしまった。

冷凍室のドアも、あけ放たれたままになっている。そしてそこには、時彦のかげもかたちもないのだ。

「しまった！　おそすぎた！」

三吉は地だんだふんで、くやしがあった。三吉が穴におちて気を失っていたころ、権兵衛たちがやって来て、コ

チンコチンにおつた時彦の死体をはこびだしてしまつたにちがいない。

「残念だなあ……」

三吉はがっかりしてつぶやいた。もしあのとき、穴に
つい落しなかつたならば、時彦をぶじに助けさせたのに
ちがいないのだ。

と、そのとき工場の門のあたりでエンジンの音がした
かと思うと、自動車のヘッドライトがキラッと光つた。
車はいつてきたのだ。三吉は思わずしゃがんで、そつ
と窓から外のようにすをうかがつてみた。二台の車がとま
り、五人の男がぞろぞろとおりてくる。

「おい、へんだぞ。工場に電灯がついているではない
か」

そう言ったのは、音羽権兵衛の声だ。三吉は思わず首
をすくめた。スイッチをひねって電灯をけすひまがな
つたのである。

「おかしいな。入口のドアがあいているぞ」

今度の声は、製氷技師の杉川徳平だった。五人の男は
どやどやと工場にかけこんで来た。

「見つけられたら一大事だぞ」

三吉はすばやくあたりを見まわして、となりのへやに
にげこんだ。そこは物置なのだろう。イスやテーブルが

たくさん積み重ねてある。三吉はドアを三センチばかり
すかせておいて、そのすき間からそつとのぞいて、よう
すをうかがうことにした。

シベリア物語

「おッ、たいへんだ。時彦が逃げているぞ！」

「なにッ、しまった！」

眼帯の男とせいたかノツポが、冷凍室をのぞいたとた
んに、口々に叫んだ。

「ちくしょうめ、どこへずらかりやがつたんだ……」

くやしそうにしわがれた声で言ったのは、あの金歯の
男であった。

いままで三吉は、この五人の男が時彦の冷凍死体をは
こびだしたものとばかり考えていたのである。

ところが、彼らのあわてたようすから判断してみると、
そうではないらしい。時彦は自分からナワをほどいて、
逃げたのだ。

急にモーターの音がやんで、あたりが静かになった。

技師の杉川徳平がスイッチを切ったからだ。

「おい半公、時彦の手足をロープでくくつたのは、お

ように、ピシピシと折れてしまった。

「しかし、それにしてもおかしい話じゃないか。ピニールがおおると同時に、時彦のからだもおおっているはずだ。こおった人間が逃げだすわけがないだろう」

「そうだ、親分のいうとおりだ」

眼帯の男が、権兵衛のきげんをとるように言った。

「冷凍された人間が動けるならば、冷凍魚だって水中を泳げるはずじゃねえかよ」

せいたかノッポも言った。

「うん。だが、かならずしも否定することはできないんだ。広い世界にただひとつだけ、こおった人間が歩きだした記録がある」

製氷技師は学校の先生のように、まじめな顔で説明をはじめた。

「一八五四年のことだから、いまから百六年まえの話だ。シベリアのノボシビルスクという町のはずれで、百しようのばあさんが、ふぶきにおそわれて、カチカチにこおってしまったんだ。ふぶきがやんで、それを発見した町の人は、おばあさんがすでに死んでしまったものとばかり思っていた。なぜならば、かの女のからだは氷みたいにかたく、冷たかったからだ」

「それからどうなったんだ」

半公が言った。金菌が光ってみえた。

「ところがおばあさんは、からだのしんまでこおっていたわけじゃなかったんだな。心臓だけは動いていたんだ。やがておばあさんはむっくり起き上がると、まるであやつり人形のようにギクシヤクした足どりで、自分の家へむけて帰っていったという話なんだ」

「ふむ。それからどうなった？」

せいたかノッポがきいた。

「知らない。ぼくが読んだ本にはそこまでしか書いてないんだよ」

「ふーむ」

人々は腕をくんだり首をかしげたりして、考えこんでしまった。

「すると時彦のやつも、冷凍になりかけたまま、逃げだしたというわけだな？」

「そうだな。いまごろはコチコチのからだで、町の中をうろついているかもしれない」

そう言うと、権兵衛はふたたび元気をとりもどしたように、子分たちを見まわした。

「夜があけたら、おまえたちは手わけをして時彦をさがすんだぞ。見つけたらわしの家へつれてこい。わかっただか」

「へえ」

「つれて来た者には、特別のボーナスとして十万円のほうびをやる」

「へえ、ありがたいな」

半公がうれしそうに笑った。

やがて五人の男が立ち去ってゆくと、三吉は物置からでてきて、窓から外をのぞいてみた。二台の車はガソリンの煙をのこして走っていった。

三人組

それから二日のちのことである。三吉はお客さんのくつをみがきながら、心の中で、時彦のことを考えつついていた。運わるくイカリ組につかまってしまおうと今度こそたすかるまい。考えただけで、三吉はくらい気持ちになつてくるのであった。それとも、全身にしもやけを起こして死んでいるかもしれない。

「なあカメさんよ。おまえさん、へんなうわさを聞かないか」

そう言ったのは、三吉がくつをみがいている男の人だった。鉛筆を耳にはさみポケットにメモをさしこんでい

るから、新聞記者にちがいない。

「へんなうわさって、なんだね?」

となりでくつをみがかせている人が、きき返した。カメラを片手にもっているから、カメラマンなのだろう。カメさんとは名前がカメというのでなく、カメラマンのカメラらしいのだ。

「きのうの夜のことだ。日本橋のパン屋にみょうな人間があらわれたんだよ。ぼうしからオーバーまでまっ白にしもがついていて、まるで冷ぞう庫からでてきたような男なんだ」

「ふうむ」

「そいつの歩き方が、ギクリ、バタリ、ギクリ、バタリというふうな、人造人間みたいなんだよ。パン屋の小僧がびっくりして目をまわしたという話さ」

それをきいた三吉は、みがいていた手をとめて、新聞記者に話しかけた。

「おじさん、その人は片手がなかったたでしょう?」

「おや? よく知ってるんだな」

新聞記者はびっくりしたように三吉をみた。

「それ、人造人間ではありません。森時彦という人なんです。悪者のために冷凍人間にされてしまったんです」

『論創ミステリ叢書』から『鮎川哲也探偵小説選』の二巻と三巻を刊行することになった。目次を見ていただければお分かりのように、これは『鮎川哲也少年小説コレクション』(全3巻)として予告していた作品集を、二冊に再編集してお届けするものである。

二〇〇五年に本の雑誌社から出した『都筑道夫少年小説コレクション』(全6巻)は、続刊企画を論創社に引き受けてもらい、二〇一二年に『山田風太郎少年小説コレクション』(全2巻)、二〇一三年に『仁木悦子少年小説コレクション』(全3巻)を刊行した。引き続き、鮎川哲也と高木彬光の少年ものを集成すべく編集作業を行っていたが、刊行が延び延びになってしまった大きな理由のひとつが売れ行きの不振であった。

そこで編集部と協議のうえ、既に固定読者の付いてい

る『論創ミステリ叢書』に組み込むことにした次第。この『鮎川哲也探偵小説選Ⅱ』、『同Ⅲ』に続いて『高木彬光探偵小説選Ⅱ』以降も刊行される。編者としては『少年小説コレクション』シリーズの形態にも愛着はあるが、何よりもまずは作品を刊行することを優先すべきと考えたからである。読者諸兄弟のご理解とご支援をいただければ幸いである。

多くの鮎川ファンが少年向けミステリの存在を知ったのは、一九八八年五月に光文社文庫から作品集『悪魔博士』が刊行された時だっただろう。同書は学年誌に七回にわたって連載された表題の中篇と、連作「鳥羽ひろし君の推理ノート」全十二話のうち、「灰色の壁」「鯉のぼりの歌」を除く十話を収めた文庫オリジナル短篇集であ

った。

山前讓氏による解説には、一九五七（昭和三十二）年から六三年にかけて旺文社の学年誌に発表された主要なミステリ作品の一覧表が挿入されており、当時大学生になったばかりのミステリ・ファンだった私は、その圧倒的な情報量に目がくらむ思いがしたのをハッキリと覚えている。

佐野洋『赤外音楽』、山村正夫『怪人くらやみ殿下』、岡田鯨彦『黒い太陽の秘密』、都筑道夫『どろんこタイムズ』（桃源社『さよなら犯人くん』所収）など、その時点で単行本化されていた作品の初出データが一挙に判明したばかりか、山田風太郎、島田一男、小沼丹、笹沢左保らの未刊行作品が存在することも教えられた。このうち山田風太郎の「冬眠人間」と「暗黒迷宮党」は二〇〇二年に私が編集した光文社文庫『山田風太郎ミステリー傑作選9 少年篇 笑う肉仮面』で、小沼丹『春風コンビお手柄帳』は二〇一八年に幻戯書房の同題作品集で、初めて単行本化されている。

鮎川哲也にも「鳥羽ひろし君の推理ノート」の他に「二夫と豪助シリーズ」という全十六話の連作があり、山前氏は解説文中に「（二夫と豪助シリーズ）はまた別にまとめられる予定である」と明記している。なるほど、

鮎川哲也の少年ものがもう一冊出るのか、と首を長くして待っていたが、一向に出る気配がない。結局、「二夫と豪助シリーズ」は二〇〇二年四月に鮎川哲也・監修、芦辺拓・編で光文社文庫から刊行されたアンソロジー『少年探偵王 本格推理マガジン』に、「空気人間」「呪いの家」「時計塔」の三篇が再録されたに留まった。



後に編集者となって、山前さんの知遇を得た私は「なぜ鮎川ジュブナイルの二冊目が出なかったのですか？」と訊いてみた。答えは単純で、「『悪魔博士』が売れなかったからだよ」とのこと。現在でこそ二万部を切る文庫も出てきたとはいえ、昭和末期の文庫初刷部数は数万部だった。逆に言うと、そのくらいは売れる本でないといふ文庫にはならなかったのである。

鮎川哲也は著名なミステリ作家であり、通常の作品では安定した売り上げが見込める固定読者を持っていたが、わざわざ少年ものを買って読もうとするほどコアな読者

[著者] 鮎川哲也 (あゆかわ・てつや)

1919年生まれ。本名・中川透。50年に『宝石』100万円懸賞の長篇部門へ投稿した「ペトロフ事件」(中川透名義)が第一席で入選、56年に講談社「書下し長篇探偵小説全集」の第13巻「十三番目の椅子」へ応募した「黒いトランク」が入選して鮎川哲也と改名。60年に「憎悪の化石」と「黒い白鳥」で第13回日本探偵作家クラブ賞長編賞を、2001年に第1回本格ミステリ大賞特別賞を受賞。2002年逝去。没後、第6回日本ミステリー文学大賞が贈られた。

[編者] 日下三蔵 (くさか・さんぞう)

1968年、神奈川県生まれ。ミステリ・SF研究者、アンソロジースト、フリー編集者。編書『天城一の密室犯罪学教程』で第5回本格ミステリ大賞を受賞。

[巻末エッセイ] 北村 薫 (きたむら・かおる)

1949年、埼玉県生まれ。89年に覆面作家として作家デビュー。91年に『夜の鯉』で第44回日本推理作家協会賞を、2009年に『鷲と雪』で第141回直木賞を受賞。

「冷凍人間」と「透明人間」の挿絵を描かれた古賀亜十夫氏の著作権者と連絡がとれませんでした。ご存じの方はお知らせ下さい。

あゆかわてつや たんでいしょうせつせん
鮎川哲也探偵小説選Ⅱ

〔論創ミステリ叢書117〕

2019年5月20日 初版第1刷印刷

2019年5月30日 初版第1刷発行

著者 鮎川哲也

編者 日下三蔵

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

©2019 Tetsuya Ayukawa, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1817-7